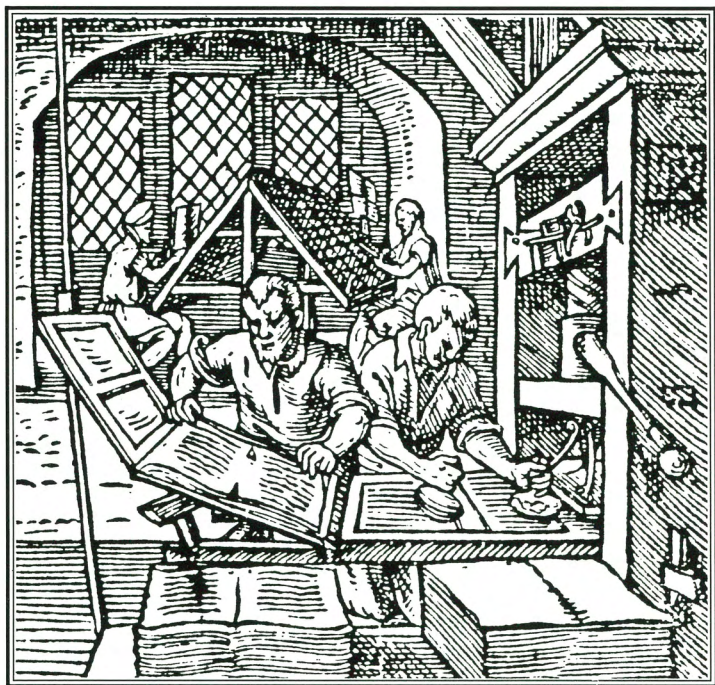


大学出版 '93 春

No.17



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会



大学出版
17号

Spring · 1993

読書の周辺	ゲーム探訪の旅	増川 宏一	1
——中国領シルクロード——			
読書の周辺	若き日の坂口安吾	金原 左門	5
——その本読みへの強烈なバトス——			
日韓大学出版部合同セミナーに参加して		小谷 昭夫	9
中国大学出版社協会訪日団を迎えて		朝武 清美	11
大学出版部ニュース			12
新刊案内'92・'93・'93			17
第14回(平成四年度)日本生命財団出版助成図書			表 3

表紙イラスト ヨースト・アマン 『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛
本冊子中の表示価格は税込みです

ゲーム探訪の旅

— 中国領シルクロード —

増川宏一

(遊戯史研究者)

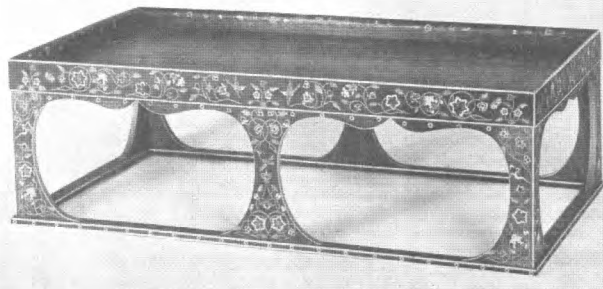
今から七〇〇年ほど前、左大臣西園寺公衡はある詳しい記録を残している。高貴な女性の出産にまつわる儀式についてである。

より正確にいうならば出産前の占い、産所の調度、要員の配置、安産の祈願、出産後の儀礼、祝儀の手配、要員への褒美、産後の祝宴などである。このなかには産所の隣に雙六盤を設置し、緋の袴の侍女と僧侶が賽をふって雙六を打つ行事がふくまれている。

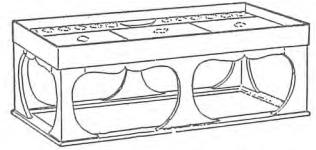
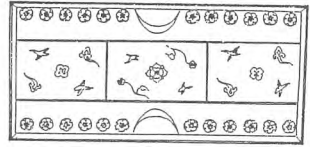
雙六はしばしば紙に描いた絵双六と混同されるが、二人で行なう盤上遊戯である。板や木箱の表面に長方形の枱目一二個が二列に描かれ、二個の賽をふって黒白一五個ずつの駒を動かすゲームである。すべての自分の持駒を始発点から終点に進めるが、進行中に互いに駒を妨害しあう複雑な遊びである。我国では古代から多くの人々に愛好され、

中世では碁や将棋よりも流行した。ただし、出産時の占具の一つとみなされる雙六盤の使用例ははなはだ珍しい。

日本における古代の雙六盤の現物は、正倉院に四面保存されている。このなかには木製の粗末な盤もあるが、最も著名なのは聖武天皇の愛用品とみなされる豪華で精巧な細工の雙六盤である。とりわけ装飾は当時の日本には見られない中央アジア風の文様になっている。そのためか正倉院蔵の雙六盤はもっぱら美術工芸上の観点から鑑賞されてきた。遊戯上の視点が軽視されてきたのは、賽や駒などの付属した遊戯具が見出されていないこと、研究者の遊戯法への関心が低かったことと、象眼の技術や材質とペルシア風のデザインや中央アジアからの影響——それ自体がきわめて重要なことであるが——に重点がおかれていたからであろう。



・紫檀木画雙六局（正倉院）



アスターナ出土の唐代の雙六盤

れた唐時代の雙六盤が発表されたからである。墳墓からの出土で螺鈿細工が施されていた。ただ大きさをみると長さ二八〇ミリ、高さ七八ミリで、実用品ではなく墓の副葬品であることは明瞭だった。

しかし、床脚状の台をもつ雙六盤の形状、盤面の花卉状の枱目、長辺の中央にある三日月形の文様、賽が飛び出さないようにつくられた盤面上の縁は、正倉院蔵の雙六盤と全く同じといえるほど酷似していた。唯一の違いは、正倉院蔵のものは側面に裝飾があり、中国出土は盤面の中央部に花喰鳥や紫雲、飛翔する鳥の裝飾のあることだった。また、『文物』の一九九一年六期号には、アスターナの別の唐時代の墓に描かれた壁画の雙六盤が発表された。侍女が捧げ持っている絵で、脚は折たたみ式の交差したものであるが、盤面は花卉状と「城」とよばれる三日月形である。

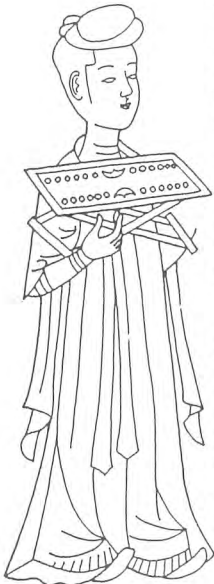
時期は前後するが一九七四年に、遼寧省鉄嶺地区法庫の

中国の考古学雑誌『文物』(一九八二年四期号)に発表された陳増弼の論考「双陸」(中国での雙六の表記)は、少数ではあるが雙六に関心を抱く者に大きな衝撃を与えた。新疆ウイグル自治区のアスターナから発掘さ

墓から雙六盤の実物が発見された。一一世紀の北宋の時代と確定している。かなり傷んではいるものの盤面はやはり正倉院蔵のものと同じ「城」と花卉状が変形した小さな円形の枱目である。注目すべきことに大きさが正倉院蔵の雙六盤とほぼ同じであった。同時に立体的な壘状の駒が黒白一五個も出土した。おそらく正倉院蔵のものも、中世の碁石状の駒ではなく、壘状の駒が使われていたのであろう。

さらに、ウイグル自治区から発見された唐時代の銀杯が、双陸が中国へ伝わった時代を明らかにした。この銀杯には様々な人物が彫られていて、双陸を遊ぶ二人の男も描かれていた。この盤面も「城」と花卉か円状の小さい点になっていた。同じ銀杯に彫られた人物像は、濃い鬚髯と服装から漢族や蒙古族でなくソグド人であった。ソグド人とはかつてのペルシア帝国の領土、現在のサマルカンド周辺を本拠にしていた商業の民である。

この銀杯は六世紀後半から七世紀初期のものとして推定され、『文物』には「当時はまだ世間にそれほど好まれていなかった双陸」と記されている。双陸の中国への伝来は、従



壁画に描かれた雙六盤

来イギリスの研究者が推定していた時代より、約一世紀古いものであった。交易ルートにより四方から新疆ウイグル地区に伝えられた時代を立証している。

これらの事実から、正倉院蔵の雙六盤がほぼどこから来たものか、現物が舶来したものでなくとも、どの地方をモデルとしたものかのおおよその見当がつけられた。これまでは、比較することができないために、漠然と日本独特の型と考えられていた。

これらの資料を入手すると、たちまち新疆ウイグル自治区を訪れたくなった。幸い、少し前にシルクロードを取材した民間放送の友人が、知りあったカシュガルの考古学者と連絡がついたと知らせてくれた。それで、いささか旧聞に属するが、昨秋に自主的な計画をたてたある団体と同行した。慌しい準備なので双陸探訪の旅といっても、成果の期待できないことは予想されたが、現地の雰囲気の片鱗でも実感することができれば、無益ではない筈である。

結果として双陸については収穫がなかったが、他の盤上遊戯について幾つかの新しい事実を知ることができた。

西安市の陝西省博物館で、象棋（中国将棋）と碁について興味深い展示品を観ることができた。写真撮影は禁止なので具体的な紹介は無理であるが、象棋については一、二世紀初めの北宋期の開封付近から出土した駒は、青銅製とみなされる薄い小形であった。敵味方が同じ種類の駒で

あることが特徴といえる。遅くとも一四世紀には、現在の象棋と同様に敵味方が将と師、象と相、炮と砲にわかれ、彩色によって区別されるようになった。展示品はより古い時代の型であった。

囲碁の展示品も興味深いものであった。唐代初期の碁石は淡緑色の玉製で、先端の円い円柱形であった。底部がやや広く細長い釣鐘状ともいえる。高さは五センチ強、底部の直径は二センチ弱のやや大きいもので、約三〇個のうち欠けたのか一箇は背が低く、一個は偏平で現在の碁石に近いものであった。打った石を動かす必要がないので、安定性を重視したものといえる。

ただ、玉製の駒を使用していたのは最高級の階層の人達である。同じ唐時代ではあるが、新疆最西端の町カシュガルの博物館やトルファン博物館で観た碁石は、甜滂現遺跡と寿昌城遺跡から出土したものであるが、偏平の円い黒石であった。

陝西省博物館の碁石と共に壁面に展示されていた壁画の一部分は、アスターナ墓群のうちの一つから発見されたものであった。やはり唐時代のものでかなり破損しているが、豊富な顔の女性が独りで碁盤に向っている絵である。日本でも紹介されているが、この碁盤の盤面は一七路一七行であった。

現在の碁盤は一九路一九行であり、正倉院蔵の碁盤も同じである。唐代には行路の数が少ない碁盤——それだけ



ゲームの内容も単純になるが——であったことは確実であろう。より古い時代には一五路一五行や一三路一三行も存在していたと推定される。

このことは旅の途中で実際に観察することができた。ウルムチ北西の小さい村込板城ダクジンチウの民家の軒下で、若い労働者風の二人が向いあつて盤上遊戯に熱中していた。傍に

やや年長の男が腰を落して眺めていた。地面に條を引き、一方は小石、他方は陶器の破片を駒の代りにして交互に盤上に駒を置いていた。條は縦横七本ずつで、駒は條の交差点に置く。つまりこの粗末なゲームは七路七行の原始的な碁であった。駒（石）を全部置いてから幾つかの駒（石）を取り去っていた。我国の碁は途中で石を揚げるが、中国では全部打ち終つてから石を揚げる。この方法は非常に古い時代から行なわれていたものと思われる。原始的な碁が実際に遊ばれているとは想像できなかった。しかも若者達によつて。

碁の原型を目撃したからといって、ウイグル地区が碁の

発生地とは断定できない。ウルムチとトルファンを結ぶ古來からの交易ルートは西へは遙かペルシアまで続いている。南は青海省からチベットに通じる。揚子江の最上流も青海省中部にある。原始的な碁がどこから伝えられたか不明である。ただ現実にウルムチ付近で遊ばれているという事実だけは動かし難い。

我国の雙六の源流を探りたいという希望は、残念ながら全く成果がなかった。その代りに、双陸でなく囲碁に目を向ける結果になった。カシユガル文物研究所の若い研究者は古代青銅器が専門で、双陸よりも古い時代（紀元前数世紀）に流行した六博リクハクについても満足できる情報を得ることはできなかった。

つけ加えるならば、象棋は西安から西に行くにしたがつて、チェスにとつて代られるようになる。敦煌トウキウはまだ象棋のみ遊ばれているが、トルファンやウルムチではチェスに興じる人達が全体の三割程度であろう。カシユガルになるとチェスを楽しんでる人達が大半である。漢民族が二割に満たない人口で、イスラム教徒のウイグル族が大半の土地では象棋を遊ぶ人達は稀といえる。

その他、中国の現代の絵双六を幾種類か入手した。小さい町の商店に置かれていたが大都會の百貨店では売られていない。もう中国でも絵双六で遊ぶ人は稀だという。

駆け足のゲーム探訪の旅であったが、新疆ウイグル自治区の現状をかなり知ることができた。

若き日の坂口安吾

—その本読みへの強烈なパトス—

金原左門

(中央大学法学部教授)

熊楠：安吾と—碩学の系譜

碩学という言葉が頭をよぎった。学問の広く深い「大学者」を意味するこの文字は、近ごろとんとみかけない。しかし、碩儒・博碩とも置き換えられるこの表現には含蓄がある。というのは、碩学というからには、広い守備範囲の学問内容の充実度がたえず問われるからである。

わたしが碩学という用語をなんとはなしに辞書のなかからつまみあげていたのは、昨年七月のはじめ故平野威馬雄の『くまぐす外伝』(ちくま文庫)を読み返したときであった。この南方熊楠の伝記は、平野が着実に収集したデータをあますところなく駆使して堅実な筆致でえがききついている。もっとも、著者自身は、「偉大で底知れぬ人」熊楠について書きたりないとぼやいているが、熊楠の書簡とか民俗学にかんする文章を多少読んだだけのわたしにも、その嘆

きはホンネとして伝わってくる。にもかかわらず、この伝記が生き生きとしているのは、熊楠の碩学ぶりが読む者にびんびん響いてくるからである。とりわけ、熊楠が二十数か国語をマスターするきつかけとなり長い海外のどん底生活のスタートともなる滞米時代から、仏教、日本の古典、歴史、さらには専門の粘菌類の研究をはじめ、ひろく自然諸科学にいたるいわゆる学際的学風を身につける滞英期にかけての叙述は庄巻で、若き熊楠の俗流学会主義へのあくことなき批判と、碩学への道を切り拓く知識の集積ぶりが(読書力)がみごとに映しだされている。

碩学にみえざる碩学、ここに熊楠の真価をとらえる手がかかりがひそんでいる。『くまぐす外伝』を読みながら、わたしは近代日本でこの種に類する碩学はとなるとどんな人物があがるか等々想いをめぐらしていた。熊楠に一目おき、熊楠も信をおいていた柳田国男、あるいは高野山管長の土宜法竜は、とうぜんその名をあげえようが、なぜか、わたしは、いつの間にか、坂口安吾を熊楠の精神的な生きざまと点線で結びつけていたのである。

安吾のエートスに迫るには

坂口安吾は、説明するまでもなく、『白痴』、『日本文化私観』、『墮落論』などの代表作をもつ作家、評論家である。

安吾は、アジア・太平洋戦争での日本の敗戦後の混乱期に、太宰治とともに「無頼の文士」と呼ばれたり、ときには「新生日本の魂の旗手」、「戦後の可能性の文学の代表

者」と絶讃されてきたことはよく知られている。その安吾を、なぜ熊楠との出会いの場に連れだそうとするのか、このような論じかたには、とうぜんのことながら異論、反論がでてくるのは百も承知のうえである。わたしは、安吾が袴を着て格式ばった学界、とりわけ歴史学の世界を軽蔑し、独自の構想力、分析力を身につけるべく広い学問分野で奮闘努力を重ねた若き日のエートス（生活態度）が青春時代の熊楠とふれあうその接点を重視したのである。

この事情については、杉森久英の快作『小説坂口安吾』（河出文庫）を読んだだけではつかめない。安吾の作品の大半に目を通し、歴史小説、風俗小説、説話風物語、捕物帖、推理小説といったような文学作品や、芸術論、作家論、身辺雑記、史譚、紀行文の類をとときにはつきあわせ深読みしていかないと安吾の実像に迫ることはできない。

わたしは、荻野アンナのように、安吾に惚れこみ、のめりこんで『アイ・ラブ安吾』（朝日新聞社）をものにするといった気は、さらさららない。荻野のこの本は小さな文芸評論集であるが、そのなかの好評論「片翼のペガサス」は、安吾の魅力をめぐって入れこみ過多が鼻につくとはいえない。主として文学の構図とその手法をみごとにえぐりだしている。しかし、文脈のところどころには、主観があまりにも走り過ぎるので論旨のトーンが乱れたり、説明が上擦っている嫌いがある。

安吾にわたしが興味をいだいたのは、彼の親父の坂口仁

一郎が引き金になっていたといつてよい。安吾には申し訳ないが仁一郎との出会いのほうはずっと早く、むしろ、この人物にわたしは、一時熱い視線を浴びせていた。というのは、わたしは、一九五〇年代の後半から六〇年代の初めにかけて、農村史の共同研究で新潟県の蒲原平野を中心にフィールド調査を進め、そのなかで自由民権期に改進黨の重鎮市島謙吉（春城）とともに政治活動をくりひろげ、後に新潟新聞社（現新潟日報社）を創設した仁一郎の存在を無視しえなくなったからである。実業家で、民権運動の流れを汲み、非政友畑を歩み、憲政会の領袖として中央政界でも重きをなした仁一郎は、『北越詩話』で知られる漢詩人としての令名も高かった。

安吾は、漢詩人仁一郎と太い絆で結ばれていた。また、その政治性とも関係がある。仁一郎の存在を抜きに安吾を語ることはできない。これまで、二人の関係については論じられることがなく、多少言及した評論でも、すべてピントがはずれている。ことは、安吾の一九四六年（昭和二一）の作「石の思い」（『坂口安吾全集』4）の読みかたにかかわってくる。いずれ語るときがくると思う。

読書傾向からみた安吾の持統音

安吾と坂口家との関係について、わたしがたまげたのは、安吾の母アサが、わたしが以前お邪魔したことのある中蒲原郡五泉町（現五泉市）の五〇〇町歩地主吉田家の出ということであった。アサは、久平を襲名とする父吉田久

平が仁一郎と政治行動を共にしたのが縁で、仁一郎の後妻にはいったという。

安吾の母が旧姓吉田アサであることは、安吾の書誌学では第一人者の関井光男の作成した年譜によって知った。わたしは、こうして安吾の精神形成にもつ吉田家とアサとのかわりあいにも興味をかきたて、その観点からも安吾の作品を読み、やはりいくつかの仮説をたてている。

ところで、わたしは昨春から夏にかけてちくま文庫版の『坂口安吾全集』全一八巻のかんりの作品を読んでみた。文庫本とはいえ六〇〇ページから八〇〇ページのボリュームの巻を、つれづれとはいえ、安吾流にあちこちに持ち歩き、眼光紙背に徹する思いで読むのは気骨が折れる。それでも全巻の三分の二の一二巻まで符箋がはいった。符箋には、さまざまな思いからの安吾解剖へのアプローチの意味がこめられているが、その一つに安吾の安吾となりをつくりあげていった修業への心がけ、知的生産力を高めていくうえででの原蓄のしかたに興味をそそられたのである。

安吾が読書に傾注しはじめるのは、新潟中学でふたたび落第のおそれがでて、東京の豊山中学校に編入学する一六歳の年であった。一九二三年（大正一二）のことである。読書の傾向は、兄猷吉の影響による文学と宗教、それに自然哲学である。文学は、翌々年中学を卒業し小学校の代用教員をつとめる年にかけて、石川啄木、北原白秋、谷崎潤一郎、正宗白鳥、佐藤春夫、芥川龍之介、バルザック、さら

に、チェーホフの『退屈な話』など短篇の英訳を耽読したという。この文学への触手が一つの伏線で、この間、安吾は短歌を作り、創作への意欲をみなぎらせ、戯曲を執筆して自信を喪失したりというジグザグな経験を踏んでいる。

その過程で安吾は、宗教なかんずく仏教への根本的な思索をふかめ、悟りの境地をもとめて座禅を組んだりした。この第二の伏線ともいえるべき仏教の色読は、安吾の動機がいまのところ秘密のヴェールに包まれている部分が多いとはいえ、なぜかゆるぎなきものがあつた。宗教への安吾の深い関心度は戦中から戦後にかけての彼の文学・評論活動を支える持続音になっていった。この点も論証が可能で、安吾のユニークな行動を解く鍵の一つでもあるので、いざれ論じることにはしたい。ただここでふれておきたいのは、安吾が代用教員を一年で止め、東洋大学印度哲学倫理学科に入学する前後から「求道」の厳しさへの憧憬の念を断ち難く、梵語、バリー語に本腰をいれて取り組んだということである。碩学への基礎づくりというべきか。関井光男の「坂口安吾年譜」によると、当時、安吾は一日の睡眠四時間、の猛勉強生活を一年半続け神経衰弱におちいり、「発狂の予兆」に怯えながら、なお、古今の哲学書を読破したという（『全集』18）。恐るべき読書エネルギーである。

安吾の「ファルス」指向と資料収集能力

このころの安吾の外国語修得への努力はすさまじかった。安吾は、アテネ・フランセに入り、フランス語の初級、

中級、上級と着実に階段を登り、高等科に進級したときには、ラテン語、ギリシヤ語のクラスにも出席したらしい。

当時のことを安吾自身語ったものとしては「処女作前後の想い出」(『全集』14)がある。安吾は、そのなかで、「一流の本能」がないと諦めて「坊主」になろうと考え、それも「悟りの実体」に幻滅しふたたび文学に逆戻りして「落伍者の文学」を認じ「ファルス作家」になろうと思つてフランス語の勉強を始めたと説明している。しかし、これは話の辻褄合せにすぎない。それも安吾一流の「ファルス」(悪ぶざけ)のごく単純な言いまわしである。

安吾のフランス語は本物らしい。アテネ・フランスの文学愛好者の同人誌『言葉』、『青い馬』で、芥川龍之介の甥の葛巻義敏にせがまれて安吾は、ヴァレリイの「ヴァリエテ」、ジイドの「オスカア・ワイルドの思い出」、コクトオの「音楽論」をはじめ数多くの作品を、ほとんど一夜で訳したという。スピードを要求される安吾の翻訳の流儀は、辞書抜き、難解な箇所の手抜きで、出来上りは流麗、難読なヴァレリイやコクトオを明快にしてしまう手口であった。安吾は、小林秀雄が「ヴァリエテ」の訳をほめたとき、おちよくっている。

このエピソードをみても、安吾の語学力は抜群だったらしい。安吾のフランス語は「自意識の分裂」を克服するたためでもあったという見方があるが、もしそうであるとすると、わたしたちは、ただただ唸るだけである。

安吾の自己診断の採点は厳しい。安吾はたえず自分は没頭できない性格、謙虚さが欠如している、獨創性に欠け模倣癖が旺盛であるというようなことを口走り、愚かな性分の「その愚かさ」を完成するしかないものべていた。その安吾について彼の「勤勉ぶり」は徹底的に見事であると安吾の実像を紹介したのは、当時小田原にいた詩人の三好達治である(『三好達治全集』6、筑摩書房)。もちろん、読むことと書くことへの執念であった。一九四〇年(昭和一五)、達治の勧めで安吾は『日本切支丹宗門史』を読んでいた。なぜか。その理由は「安吾新日本地理」(『全集』18)を読んでいて気がついたのであるが、そのころ島原の乱を書く意欲をもっていた安吾は、一時、長崎の図書館に毎日通いつめ、「南高来郡一揆の記」とかそこにしかない郷土史料を筆写し、さらにキリシタン資料の主要なものはいたい集めていたらしい。『宗門史』は、そのための読書であったことは間違いない。しかし収集資料は戦時中に紛失してしまい、『島原の乱』も幻と化してしまった(拙稿「坂口安吾と小田原」『おだわら—歴史と文化』第六号)。

安吾の読書への熱中ぶりは、戦前・戦中の時代のいたるところで顔をだしている。戦後、安吾が縦横無尽に活動する基礎は、この時期の彼の読書への情熱と実践の積み上げのなかにあった。かつて、新潟中学時代、炳吾(本名)にたいし「暗吾」と烙印を押しした漢文教師の見立違いをあざけるかのごとく、安吾は「碩吾」の道を行んでいた。

日韓大学出版部合同セミナーに参加して

小谷昭夫
(放送大学教育振興会)

成田から約二時間のフライトで、秋深い釜山空港に着。東亜大の孫先生、釜山工業大の金先生の出迎えをうけ、会場のグランド・コンデ・ホテルへ。

ホテルの前は白砂の続く海岸、後ろは山。その山なみに向かって市街地開発が急ピッチで進んでいた。海に迫る台地が急激に落ちこんで変化に富む岬となり、観光地、景勝地を生み、『釜山港へ帰れ』などのヒットメロデーともなったとか。晴れた日には宍岐・対馬の鳥影もはっきり見えるという。——いちばん近くて最も遠い国「韓国」への、初訪問の機会が与えられたセミナー出席報告である。

★韓国大学出版部の現況

① 協会に加入している大学出版部は五十九。今回のセミナーには三十六校から六十人が参加した。出版部は大学に直属する一部局で、責任者は出版部長。出版部長の任期は二年間で、大学当局指名の教授が就任する。

② 刊行書目は教授等で構成する委員会を決め、部数・定価等は部長が専決。課長以下の出版部職員は決定に従って編集・製作の実務を担当する。筆者は当該大学の教授で、多くは年間二〜三点の刊行に留まるが、中心校のソウル大では四十点内外、延世大は三百点前後と飛び抜け

ている。

刊行書は学内で使用の教科書、特殊な研究論文集・学術書に限られ、一般書店を通じての販売はない。

③ 年一回の合同セミナーは新任の出版部長にとって格好の研修の場で、とくに日本で行われる場合の出席者は圧倒的に出版部長（実務担当の出席は二〜三人）、テーマは原則的に「韓国の大学出版の現況と課題」となる。

★悩み多い実務担当者の希望と期待

① 現状では、いかに自分たちが「こんな本を出版したい」と思っても、実現の道のないことが最大の悩み。協会は部長に任せ、編集委員会などいくつかの組織を独自に作り協議はしているが、「企画から販売まで責任を共有する出版部活動」のあり方を部長たちに教えてほしい。

② 「韓国出版部協会図書展」開催の計画があるが、日本からも参加してもらえないか。将来は中国も加え三国の図書展にしたいが、協力してもらえるか。



韓国大学出版部協会の金会長(左)と記念品の交換

③ 相互に翻訳出版はできないか。方法・隘路など、日本の各出版部の考えを教えてほしい。

④ 合同セミナーに実務担当が出席できるよう、「合同セミナー招待基金」を相互に設立できないだろうか。一出版部月額千円程度の拠出で十〜二十人の経費補助ができるので、現在のような「韓国からは部長中心、日本からは小さな代表团」の打破にもつながると思うがどうか。

★安くてうまい韓国料理

セミナー終了後、実務担当者八人と外出、ネオンや看板はもちろん、バスの行先表示や交通案内などハングル文字一色。国鉄駅で併用されている英語案内が妙に懐かしく、「KARAOKE」のネオンにほっと一息。

行きつけの店か、漁港の突端にあるテントばり屋台で二次会。活きアナゴのぶつぎり、アジのたたき食べ放題、韓国焼酎とビールを気ままに飲んで、一人千二百円少々。ホテルでのコーヒーこそ四百円はするが、一流店でも名物の骨付きカルビ千五百円、参鶏湯千二百円、韓定食、特急食堂車のディナーが千円。ちなみに帰国後に新宿で食べた骨付きカルビは二千五百円、参鶏湯三千五百円だった。

★童謡の中に希いをこめて……

ホテルにもどった私たちをロビーの日本料理店「みうら」で待っていたのは、金会長、宗副会長ら協会幹部の先生方。活きダコの造り、韓国風の鍋を着に三次会。

「一部には、まだまだ日本への恨みを忘れない人もいま



釜山駅前、市街地に山が迫る



韓国の新幹線セマウル号の食堂車で

す。でも、私たちには、明日のほうが大切です。戦前、日本に住んだ時に歌った歌を、今夜は一緒に歌いましょう」

「夕焼け小焼けの赤とんぼ……」

「ウサギ追いかの山 小鮎釣りしかの川……」

夜更けの釜山の町に、遠い日の思い出、たちがたい望郷の想い、そして明日への希望、共通の心を求めて、金会長、宗副会長らの歌声が、いつまでも流れつづけた。

▼日程 一九九二年一月六日〜九日 ▼日本側参加者 小谷 昭夫・惣塚 一雄・西村 賢二・三浦 義博

▼日本側主題発表表

「ボーダレス時代における学術専門書の刊行」三浦 義博

▼韓国側主題発表表

「韓国の大学出版の現況と課題」……………車 培 根

中国大学出版社協会訪日団を迎えて

朝武清実

(東京電機大学出版社)

高炳章（中国大学出版社協会理事長、国家教育委員会条件装司副司長）氏を団長、麻子英（中国大学出版社協会副理事長、北京大学出版社社長）氏、万中一（中国大学出版社協会副理事長、華東師範大学出版社社長）氏を副団長とする中国大学出版社協会メンバーの一行一〇名が、一九九二年一〇月二十九日（木）から十一月三日（金）までの一六日間訪日された。

訪日の目的は、日本書籍出版協会ほか主催の「92東京国際ブックフェア」（一〇月三二日～十一月四日まで池袋サウンシャインシティ東京コンベンションセンター文化会館にて開催）の視察並びに日本の大学出版部協会との交流、各大学出版部の業務視察、書店の視察等である。

滞在中の主な日程は、次のとおりである。

一〇月三〇日（金） 東京大学出版会を訪問、懇談のあと東京大学図書館等を見学した。夜は、在京加盟校の幹事、中平顧問、高野元幹事、加藤前幹事が参加し、上野の東天紅で歓迎晩餐会を開催した。

一〇月三十一日（土） 「92東京国際ブックフェア」の開幕式に出席し、終日展示会場を見学した。

十一月一日（日） 東海大学建学五〇周年記念式典及び祝賀会に出席した。

十一月二日（月） 中央大学を訪問、午後は明星大学を訪問し、学校関係者と懇談した。

十一月五日（木） 東京・神田の三省堂書店を訪問し、店内見学・店長ほか関係者と懇談した。午後は東方書店を訪問し、安井社長ほか関係者と懇談した。

十一月六日（金） トーハンを訪問し、本の流通ルートを見学した。午後は大蔵省印刷局滝野川工場を訪問し、日本で使用されている紙幣の印刷工程等を見学した。

十一月七日（土） 名古屋大学出版会を訪問・懇談の後、市内の書店等を見学した。

十一月九日（月） 京都大学学術出版会を訪問。生協書籍部や図書館等を見学した。午後は、市内の書店を見学。夜は懇親会を開いて懇談した。

十一月一〇日（火） 関西大学出版部を訪問。学長と面談のあと学内を見学し、午後は国立民族学博物館等を見学した。

十一月一二日（木） 大阪経済法科大学出版部を訪問。学長と面談のあと学内を見学し、関係者と懇談。夜は懇親会を開いて懇談した。



東天紅にて歓迎晩餐会（'92年10月30日）

北海道大学図書刊行会

▼一月一日の釧路沖地震は、震度6の烈震を記録し、大きな被害がでた。山岸宏光編『北海道の地すべり地形』(B4判・五一五〇〇円)は、北海道全域にわたる地すべり地形を記録・解析し、それに地質・気候等の多くの要因分析を加えて集大成したもので、日生財団の出版助成を得ての刊行である。地すべ

り地形図二九六枚、解説図版一〇〇枚を収録した、世界に類のない「地すべり分布図」であり、地すべり解説書である。▼時計台・豊平館など、北海道は初期洋風建築の実験場の観があった。越野武著『北海道における初期洋風建築の研究』(B5判・九二七〇円)は、一九九一年度日本建築学会賞を受賞した研究の成書。長年の徹底した調査を基に、地域性を超えて、初期洋風建築の歴史的意義を論じている。

聖学院大学出版会

当出版会では、聖学院大学総合研究所の紀要、Newsletterの編集・製作を担当している。研究所では、現在、日本私学振興財団の学術研究振興資金の援助をうけ三年計画で、「デモクラシーの研究」を行っているが、近々刊行される「紀要」第三号にはその成果として、次の論文が掲載される。酒井文夫「デモ

クラシーと法制度——違憲審査制を視座の中心として」、隅谷三喜男「東アジアのデモクラシーと開発独裁——韓国・台湾と中国」、近藤勝彦「エルンスト・トレルチにおける自然法の問題——とくにデモクラシーとキリスト教の関わりをめぐって」、大木英夫「デモクラシーとピューリタニズム」。これらの論文は、研究完了時に、出版会より単行本として刊行する予定である。

大学出版部ニュース

慶應通信

▼『新版・経済原論』(千種義人著・五五〇頁・三九〇〇円)本書は、昭和四三年初版以来増補・改訂を重ね刊行されてきたが、今回、全面的にリライツされ、新版テキストとして世に問うことになった。

本書は、経済学および経済問題に関する基礎概念と基本理論を網羅し、専門科目の基礎とな

るべき知識と分析用具を提供するものである。また最近の経済理論や経済問題の基本となるものをつとめて解説するとともに古典派経済学の思想や学説をも紹介している。内容の構成は三部に分かれ、第一部は経済学の基本問題と経済体制、第二部はミクロ経済学として消費、交換、分配を、第三部はマクロ経済学として国民所得を中心に雇用、物価、景気変動、経済の成長と発展を述べている。

産能大学出版部

▼東京・神奈川の四十三都市のデータをサンプルにして重回帰分析、数量化理論1、2、3類からクラスター分析までの八種類の変量解析の理論と実際を詳細に展開した『変量解析の実際』(本多正久著、A5判・三〇〇〇円)が完成した。著者開発の多変量データ解析システムのソフトMDH(Multivariate

Data Handler)も同時発売され、各大学からの注文・問合せが相次いでいる。
▼企業や自治体等での社会対象の研修講師養成テキストともいえる『研修インストラクター入門』(小橋邦彦著、四六判、二三〇〇円)は、バブル崩壊後の厳しい経営環境の中、社内インストラクター養成のニーズに合致して、好評である。類書が少ないだけに今後の健闘が期待できる一冊である。

玉川大学出版部

▼今日の教育制度の枠組を考える上で示唆を与えてくれる四冊が刊行された。▼天野郁夫『旧制専門学校論』は日本の高等教育の基本構造は、明治期の帝国大学と専門学校に溯ることができるとする。▼M・T・オア『占領下日本の教育改革政策』は、GHQ民間情報教育局の責任者として立ち会った教育改革

の過程を克明に記録している。▼黒羽亮一『戦後大学政策の展開』は戦後の高等教育政策を整理し、高学歴社会への大学の対応を位置づけている。▼荻谷剛彦『アメリカの大学・ニッポンの大学』は教育と学習がめざす根本的な意義を、日米の大学での実際の運営を比較することから説き起こしている。▼日本社会の国際化の動きの中で、世界に通用する教育の共通意識が求められているのではないか。

中央大学出版部

▼P・シユロツサー／小島武司編訳『国際仲裁の法理』（定価一四四二円）
国際仲裁法の分野において法理論的に世界的権威者であるペーター・シユロツサー（ミュンヘン大学）教授の研究報告。国際仲裁の現在問題、仲裁裁判断所の管轄、仲裁と国家法、仲裁人と忌避の論考を訳出。

▼経塚作太郎著『現代国際法要論（補訂版）』（定価四二二〇円）
国際法規則の実体を正しく把握することから、国際人権規約、条約法に関するウィーン条約、国連・海洋法条約など集团的安全保障制度の質的变化を、国際法の全域にわたり体系化し、平易に解説した前者を、さらに国際連合の「平和維持活動（PKO）」まで全体を見直し、新国際秩序にも寄与せんと意図して同書を補訂した。

大学出版部ニュース

東海大学出版会

▼大学人が結集して環境問題に挑んだ『熊本発 地球環境読本』（九州東海大学地球環境問題研究会編）が、第十四回熊日出版文化賞に決った。
同賞は地域文化の掘り起こしと出版活動の振興を図ろうと、前年一年間の県内居住者による出版物の中から特に優れた図書や出版人に送られるものである。

▼『道徳書簡集―倫理の手紙集』セネカ著・茂手木元蔵訳
本書は、道徳という言葉本来の意味の再認識に迫る。ここから導き出されるものは現代消費文明に対するアンチテーゼである。経済再建をうたう国家指導者、消費文明の破局は既に宣言されたと現代をとらえる人々、どちらとも現代文明の座標軸を転換させる触媒に道徳がなり得るとは考えていない。（産経新聞二月一日夕刊・文筆業 高野繁）

東京大学出版会

ヒトは誕生の地アフリカからユーラシアへ、そしてさらに地球上をどんどん歩きだし、その中にはじめて海をわたった人びとが出現した。彼らの生活の舞台となったオセアニア、そこは大航海時代に「発見」され、地理的にも歴史的にも「辺境」と位置づけられてきた。
しかし、西欧近代文明のいき

づまりとそれを受容して近代化を遂げた日本などのアジア諸国の狭間にあって、独自の文化を育んできたオセアニアに今新たな照明をあてるべき時代がきた。石川榮吉監修『オセアニア』（全3巻、各三〇九〇円）は、日本のオセアニア学の最新の成果であり、大塚柳太郎・片山一 道・印東道子編『1 島嶼に生きる』がこのたび刊行された。続刊『2 伝統に生きる』『3 近代に生きる』



大学出版部ニュース

東京電機大学出版局

チャールズ・K・デュード
ニー『チューリングオムニバス』
▼チューリングオムニバスは、
コンピュータサイエンスへの気
軽な入門書で、4巻から構成さ
れている。

書名からして面白い。文字ど
おりコンピュータの祖であるチ
ューリングの名を冠した選集
(オムニバス)の意味でありな

がら、さらに本書の構成が、コ
ンピュータサイエンスの街を観
光バス(ツーリングオムニバス)

が訪ねるスタイルをとっている
ことの語呂合わせとなっている。

アプリケーションソフトと
ゲームだけではない、次世代の
コンピュータサイエンティスト
を育てようという原著者の意気
込みと質の高さがうかがえる。

①アルゴリズムとデータ構造
②計算理論③機械と言語④計算
機科学の応用(各一九五七円)

▼'92東京国際ブックフェア
盛況のうちに終わる

▼'92東京国際ブックフェアが昨年
10月31日から11月4日まで、池
袋サンシャインシティ東京コン
ベンションセンター文化会館に
於て開催された。大学出版部協
会ブースへの関心は高く、入場
者は合計四一〇五名、ケース入
りの総合目録をはじめ、ほとん
どの出版部の目録が品切になる
など、盛況の内に幕を閉じた。

東京農業大学出版会

▼『日本庭園の特徴―様式・空
間・景観―』(進士五十八著)

この本は、当出版会では珍ら
しく再版されているもの。

本書は、日本庭園の特徴を造
園学の立場から論じ、分析し考
察したものである。全体が三部
から構成されている。第一部の
「様式論」では、日本庭園とい
う独自性をもった庭園様式がど

のような背景から形成したか。
第二部の「空間論」では、日本
庭園というものはいったいどう
いう空間構造をなし、どうい
う材料でどのように構成されて
いるのか。第三部の「景観論」
では、日本庭園の特徴をあらわす
言葉としての①縮景、②借景、

③刈込、④季節感とわび・さび
等は、庭園の中でどのような景
観の構造や構成になっているの
かを明らかにした、非常にユニ
ークな学術書である。(五千円)

法政大学出版局

▼本号の「書物の周辺」をご執
筆いただいた増川宏一氏の著作
を紹介する。既刊は現在五点・
八冊。(ものと人間の文化史)シ
リーズに収録されている。従
来等閑視されてきた遊戯や賭博
を、古代から現代にまでわたっ
て歴史上に位置づけた著作群は
いずれも高い評価を得ている。
現在は『すごろく』を執筆中。



将棋Ⅰ	……………	二四七二円
将棋Ⅱ	……………	二二六六円
盤上遊戯	……………	一五四五円
賭博Ⅰ(総説篇)	……………	二五七五円
賭博Ⅱ(外国篇)	……………	二八八四円
賭博Ⅲ(日本篇)	……………	二九八七円
碁	……………	二八八四円
さいころ	……………	二九八七円

放送大学教育振興会

▼今春の新作は八〇点。重版は六一点。放送大学'93年度の開講科目二九九点の中に含まれて、三月には学生の手に届いた。

▼市販本の売れ行きも好調。新刊書では『若者と子供の文化』（本田和子）、『高等教育論』（牟田博光）、『逸脱の社会学』（清永賢二・岩永雅也）、『変動する日本社会』（阿部齊）、『インドの思

大学出版部 ニュース

早稲田大学出版部

▼杉本つとむ編著『北槎聞略―影印・解題・索引』（定価三八〇〇〇円）を刊行した。「おろしや国酔夢譚」の主人公・大黒屋光



フランツウス カフタン
(外套) 本書より

大夫の漂流記「北槎聞略」を写真版で収録する。原本は先ごろ重要文化財に指定された、唯一現存する將軍家斉への献上本。波瀾のロシア体験談が江戸時代の海外事情を明らかにする。

▼文化大革命期に下放を経験し現在、中国文学界をリードする作家に焦点をあてた「新しい中国文学」（全6巻）の刊行を開始した。第1巻は陳建功「棺を蓋いて」（定価二四〇〇円）。市井の人々の生活を生き生きと描く。

明星大学出版部

▼世界の教育制度Ⅱ『教育制度の動向・構造』小山俊也

第1巻の世界の教育制度Ⅰ『教育制度の形成・発展』につづくものとして本書は刊行された。第1巻は古代から近代までの教育制度の形成・発展の歴史的過程について発展段階に分けて考察された書である。第Ⅱ巻はそれについて第二次大戦後

名古屋大学出版部

▼田嶋基男他編『臨床細胞学―textbook clinical cytology―』（定価九八〇〇円）90年に刊行し好評を得た『細胞診の基礎と応用』をもとに、新しく老人保健法、染色用薬品の安全処理法などの項目を加え、大幅に改訂よりヴィジュアルで読み易くした、細胞検査士を目指す人と指導医のための最良のテキスト。

から現在までの世界の教育制度の発展動向および制度的構造について総合的・具体的に考察を試みている。主に大学教育学専攻の学生を念頭において構成されているが、世界の教育制度の改革再編の動向に関心のある読者にも最適の書である。

▼井出洋一郎『美術館学入門』4月刊行の本書は、美術家の社会と美術館学芸員、美術館の歴史と現状、必要な法律等、美術館学プロパーの入門書。

▼水田洋ほか訳『アダム・スミス 哲学論文集』（定価四一三〇円）『国富論』の著者が、自然科学や認識論から美術・文芸・舞踏・絵画にいたる広範な領域にわたって独自の研究を試みた遺稿集。わが国初の全訳。

▼田口富久治著『政治学講義』（定価二八八四円）長年にわたる講義を踏まえ、近・現代の政治構造と実践の絡み合いを基礎から体系的に論述、今日の激動する政治世界を展望する。

京都大学学術出版会

田辺繁治編著『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界—』（定価四四〇〇円）。上座部仏教社会の国々タイ、ビルマ、スリランカ、中国雲南省—における宗教現象を、近年大きく変容しつつある真つ只中で、外国人二名を含む一二名の人類学者が考察。「教理」や「観念」としてではなく、慣習的行為として

の「実践宗教」がもたらした、人々の生きざまや社会変化を描いたこの論考は興味深い。

小会の創立第一作から約二二年間に五冊を刊行。うち三冊が二桁人数による共著。また、欧文による学内の委託製作物なども手がけ、編集部は、これ日も足りぬ状況だ。平成創業の「学術出版」。茨の道はまだ続きそうも、ともあれ小会はじめての「図書目録」の作成に漕ぎつけ、東の間ホッとしている。

大阪経済法科大学出版部

▼深江義幸著『現代新聞論』（一〇三〇円）

現代の新聞は、今どのような状況にあるのか。新聞の有り方が厳しく問われるなか、著者は自らの長い新聞記者生活の体験を生かし、最新データをもとに新聞界の様々な問題に斬り込む。▼葛本一雄著『今昔（騙し）談義（一五四五円）』

日本人には「騙し」という奇妙な才能があると著者は指摘する。真珠湾奇襲攻撃はその代表であり、日露・日清両大戦においても奇襲は常套手段であった。元来、弱者の策である「騙し」が、なぜかくも日本においては多用されたのだろうか。「騙し」というユニークな観点から、日本の歴史に接近する異色の書。

※両書とも三月二〇日発刊、経法大新書シリーズである。

大学出版部ニュース

関西大学出版部

▼中小企業のメッカ・大阪における構造変容の実証分析による成果を日本経済の成長発展、産業構造の転換過程の中に体系づけて考究し、現状の課題と展望を試みた上田達三著『産業構造の転換と中小企業』（定価九〇〇〇円）は財団法人商工総合研究所が選定する「平成四年度中小企業研究奨励賞」特賞に輝い

た。▼前田卓著『女が家を継ぐとき』（定価一三〇〇円）息子がいても娘夫婦との同居を望む親のホンネの姿を漫画「サザエさん」にヒントを得て「マスオさん現象」と呼ぶ。東北・北関東地方では、長男がいても長女の方が姉ならば婿養子を迎えて家を継がせ、弟の長男を婿に出す慣習が江戸時代から明治の半ばごろまで存在した。本書はその実態を調査で明らかにした。〔日本図書館協会選定図書〕

九州大学出版会

▼ジャン・パウロ『レヴァーナあるいは教育論』定価七六二二円。「愛情に恵まれた子供時代があれば、後半生の冷たい世間をしのいでいける」（第百二十六節）。ドイツの「エミール」わが国初の完訳。▼ロード・バイロン『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三編注解（田吹長彦編）定価七七二五円。「僕はま

だ見たことはないが／実体をそなえた言葉が——人を欺かぬ希望が——／そして慈愛に満ち溢れ、落伍者を陥れる異などつくらぬ「徳」が／この世にあるかも知れないと堅く信じるのだ／」（第百十四節）。百七十年余りの星霜を経て、今蘇るイギリス・ロマン派詩人バイロンの旅情。全四編注解の劈頭を飾る詳注決定版。岩本真理子『ハインネにおける芸術と社会批評の問題』定価四二二〇円、同時刊行。

新刊案内 '92・12 / '93・3

(表示価格は税込みです)

北海道大学図書刊行会

Taijin-Kyojufu or Delusional Social Phobia

Periodic Psychosis of Adolescence
Intractable Vasculitis Syndromes

戦前期北海道の史的研究

北海道における初期洋風建築の研究

生体内熱移動現象

ロシア／詩的言語の未来を読む

『米欧回覧実記』の学際的研究

北海道の地すべり地形

聖学院大学出版会

慶應通信

続近代英文学の一面

学校給食指導の手引

Company Vitalization by Top Management in Japan

増補新種保険論

増補北里柴三郎とその一門

つれづれ

戦略防衛構想—ミサイル防衛論争を振り返って—

山下 格 四六三五円

山下 格 五一五〇円

田辺達三編 一四四二〇円

桑原 真人 六五九二円

越野 武 九二七〇円

横山真太郎 四六三五円

工藤 正広 五五六二円

田中彰・高田誠二編 一〇三〇〇円

山岸宏光編 五一五〇〇円

上村達雄／海保眞夫 一六四八円

文 部 省 二七〇円

清水 龍登 八二四〇円

庭田 範秋 三五〇二円

長木 大三 二九八七円

石川 明 三四〇〇円

社会・世論調査のデータ解析

シンポジウム 華南—華僑・華人の故郷—

シヨルジュ・ギユルヴィッチにおける社会学思想(1)

国語☆☆☆指導書—養護学校(精神薄弱教育) 中学部国語科

教科書指導書—

数学☆☆☆指導書—養護学校(精神薄弱教育) 中学部数学科

教科書指導書—

産能大学出版部

感性を磨くにはどう行動すればよいか

トヨタ・日産・ホンダの生き残りをかけた世界戦略

無在庫営業が利益を倍増する

あなたを成功に導く心の習慣

平成五年度版税金対策のすべて

英語速読法

販売力強化プログラム

多変量解析の実際

人材開発と研修戦略

経営管理を学ぶ

大企業病につける薬、それは分社経営だ

上野一郎監修／浜田芳樹編著

後藤 昌幸

斎藤 直樹 二二〇〇円

真鍋 一史 五三五六円

仲 康 二二〇〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

文 部 省 一〇六〇円

最新マーケティング

産能大学マーケティンググループ編著
ビジネスディベートの方法と技術
北岡 俊明 一六〇〇円

落合孝信／飯塚真玄共著

顧客満足学
肩書きがなくなつてから、人生、面白くなる
持本 志行 二〇〇〇円

激変する医薬品産業
佐藤 忠 一五〇〇円

安田 有三 一六〇〇円

保坂 清 二四七二円

天野 郁夫 三九一四円

占領下日本の教育改革政策
S・E・フロスト Jr.／岩垣守彦訳 四三二六円

言語力形成の論理
M・T・オア／土持ゲリー法一訳 七二一〇円

狂言のすずめ
長井 和雄 二五七五円

歌舞伎をみる人のために
山本東次郎 一八五四円

今尾 哲也 一八五四円

近世日本弓術の発展
J・C・トレヴィン／島川聖一朗訳 三九一四円

戦後大学政策の展開
石岡久夫 一七五一〇円

黒羽 亮一 三二九六円

中央大学出版部
現代国際法要論(補訂版)
経塚作太郎 四一二〇円

国際仲裁の法理 P・シュロツサー／小島武司編訳 一四四二円

現代国家の理論と現実 中央大学社会科学研究所編 四四二九円

日中戦争―日本・中国・アメリカ―

中国法制史(8)
情報社会の管理会計

中央大学人文科学研究所編 四三二六円

張 晋藩／真田芳憲監修 三一九三円

中央大学企業研究所編 二一六三円

東海大学出版会

販売流通情報システム
歯と骨をつくるアパタイトの化学

浦井順一郎 二〇六〇円

岡崎 正之 五一五〇円

膝蓋軟骨軟化症―この謎に包まれた症候群―
今井望・戸松泰介 五五六二円

笑いのたくらみ―喜劇性と滑稽さの博物誌―
J・デュヴィニョー／利光哲夫訳 三〇九〇円

腰越の記―気象庁定年暮らし十年―
増澤讓太郎 二二六六円

超音波診断要覧Ⅵ―乳腺・甲状腺・その他体表臓器―
山中 健 五一五〇円

身体と場所の記号論(記号学研究⑬) 日本記号学会編 六三八六円

フィットネス&スポーツ
村上 繁 編 二〇六〇円

現代の政治思想(現代の政治学④)
白鳥令・佐藤正忠編 三二九六円

生痕化石 R・G・ブロムリー／大森昌衛監訳 四九四四円

高校現代文明論 高校現代文明論編集委員会編 一〇三〇円

新版電気工学基礎実験
電気工学基礎実験運営委員会編 二二六九円

留学生の数学Ⅱ 大屋 文正 二二六六円

行列式―理工系の基礎数学追録― 基礎数学研究会編 三〇九円

初等関数グラフ表示システム(ソフトウェアパッケージ)
TAS研究会開発著作 一二三六〇円

■東京大学出版会

東京大学 現状と課題 1 1990-1991

ブロムナード東京大学史

韓国へ東アジアの国家と社会4

イギリス教育行政制度成立史

南北戦争と国家

高齢化社会の経済政策

マスコミ研究の視座と課題

エンジニア・エコノミスト

国際法講義1

経済統計入門〔第2版〕

Pacific Neogene

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33

法の修練

ベトナムへ東アジアの国家と社会5

女性と社会保障

フランス行政訴訟の研究

江戸時代の紙幣

日本の自然史博物館

日本のガット加入問題

軍と革命

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇34

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇34

国立国会図書館所蔵

国立国会図書館所蔵

国立国会図書館所蔵

東京大学編 六三八六円

寺崎 昌男 二五七五円

服部 民夫 二四七二円

大田直子 一〇〇九四円

長田 豊臣 四三二六円

金森久雄・島田晴雄・伊部英男編 四七三八円

岡田 直之 五三五六円

栗田 啓子 七〇〇四円

藤田 久一 三五〇二円

中村・新家・美添・豊田 二九八七円

土隆一・J・C・イングル編 一三三九〇円

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

国立公文書館所蔵 一四四二〇円

ロード・ゼニング／内田力蔵訳 一五四五〇円

白石 昌也 二四七二円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

糸魚川淳二 四一一〇円

赤根谷達雄 七〇〇四円

大串 和雄 七〇〇四円

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

The Universe of English

The Universe of English

東京大学教養学部英語教室編 一九五七円

国立国会図書館所蔵

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33

社会保障研究所編 四五三三円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

糸魚川淳二 四一一〇円

赤根谷達雄 七〇〇四円

大串 和雄 七〇〇四円

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

The Universe of English

The Universe of English

東京大学教養学部英語教室編 一九五七円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33

社会保障研究所編 四五三三円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

糸魚川淳二 四一一〇円

赤根谷達雄 七〇〇四円

大串 和雄 七〇〇四円

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

The Universe of English

The Universe of English

東京大学教養学部英語教室編 一九五七円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33

社会保障研究所編 四五三三円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33 一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33 一四四二〇円

社会保障研究所編 四五三三円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

糸魚川淳二 四一一〇円

赤根谷達雄 七〇〇四円

大串 和雄 七〇〇四円

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

The Universe of English

The Universe of English

東京大学教養学部英語教室編 一九五七円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33 一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33 一四四二〇円

社会保障研究所編 四五三三円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

糸魚川淳二 四一一〇円

赤根谷達雄 七〇〇四円

大串 和雄 七〇〇四円

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

The Universe of English

The Universe of English

東京大学教養学部英語教室編 一九五七円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇33 一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇33 一四四二〇円

社会保障研究所編 四五三三円

伊藤洋一 一二三六〇円

国立史料館編 三九一四〇円

比較宗教学 ウィリアム・E・ペイドン／阿部美哉訳 二八八四円
中国巫系演劇研究 田仲一成 三七〇八〇円

アメリカ外交史概説 本橋 正 二八八四円
都市政策と市民生活 似田貝香門・蓮見音彦編 八〇三四円

中国法制史 基本資料の研究 滋賀秀三編 一八五四〇円
イギリス憲法とE.C.法 中村 民雄 五三五六円

自治の形成と市民 寄本 勝美 五九七四円
微分幾何入門 下 落合卓四郎 三〇九〇円

気象の数値シミュレーションへ気象の教室5) 時間達志・山岬正紀・佐藤信夫 三五〇二円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇36 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇36 国立国会図書館所蔵 一六四八〇円
枢密院会議事録54・昭和篇12 国立公文書館所蔵 一四四二〇円

■東京電機大学出版局
振動の解析 三船 博史 二五七五円
システム監査の基礎と実際―システムの健康度をチェックする 日本システム監査人協会編著 二六七八円

図解 ISDNの交換技術へISDN技術シリーズ) 本間良和・中野義雄 二四七二円
チューリングオムニバス ①アルゴリズムとデータ構造 一九五七円

チューリングオムニバス A・K・デュードニー／足立暁生訳 一九五七円
②計算理論 A・K・デュードニー／足立暁生訳 一九五七円

トランジスタ開発物語―研究者の創造と感性― 中野 朝安 二一六三円
第二種情報処理試験全問題解答集〔93春季版〕 二六七八円

特種情報処理試験の徹底研究〔93年版〕

日本ユニシス情報処理システム研究会編 二五七五円

オンライン情報処理試験全問題解答集〔93年版〕 二四〇〇円
デジタル移動通信方式 山内 雪路 一八五四円

ポイントスタディ 新版ディジタルICの基礎 白土 義男 二五七五円
ポイントスタディ 新版アナログICの基礎 白土 義男 二四七二円

例解 データ通信 倉石源三郎 二四七二円
Cによるスプライン関数 桜井明監修 二九八七円

無線工学Aへ1・2陸技1総通の徹底研究) 横山 重明 二四七二円
無線工学Bへ1・2陸技1総通の徹底研究) 安達 宏司 一九五七円

ニューラルシステムにおけるカオス 合原一幸編著 三九一四円
ハードも学ぶMS-DOS入門 白土 義男 二六七八円

■東京農業大学出版会
東京農業大学卒業生の農林業自営者名簿 東京農業大学OB農林業自営者名簿編集委員会編 一五〇〇円

■東京理科大学出版会
法政大学出版局 批判的解釈学 J・B・トンソン／山本啓・小川英司訳 三九一四円

人間にはいくつの真理が必要か R・ザフランスキー／山本尤・藤井啓司訳 二二六六円

中国手工業誌 R・P・ホームメル／国分直一訳 一四九三五円

自然誌の終焉—一八世紀と一九世紀の諸科学における文化的

自明概念の変遷— W・レペニース／山村直資訳 三三九—九二

時間の文化史—時間と空間の文化／上巻—

S・カーン／浅野敏夫訳 二二六—九二

狼狽する資本主義

A・コッタ／斉藤日出治訳 一四四—二二

木炭へものと人間の文化史(71)

樋口 清之 二四七—二二

雑誌『同時代』59号(終刊号)—特集・山崎栄治追悼—

黒の会編 一五四—五〇

近世城下町の研究〔増補版〕

小野 晃嗣 八〇—三四

夢の時—野生と文明の境界—

H・P・デュル／岡部・原・須永・荻野訳 五九七—四四

小独裁者たち—兩大戦間期の東欧における民主主義体制の崩壊—

A・ポロンスキ／羽場久泥子監訳 二九八—七〇

巫俗と他界観の民俗学的研究

高松 敬吉 七九〇—〇〇

ヒルファディングの経済政策思想

河野 裕康 四一—二〇〇

バベルの塔—ドイツ民主共和国の思い出—

H・マイヤー／宇京早苗訳 二七八—一〇

ポストモダン・シーン

A・クローカー&D・クック／大熊昭信訳 五〇四—七〇

西田幾多郎 その軌跡と系譜

藤田 健治 一九五—七〇

阿蘇神社祭祀の研究

村崎真智子 二二八—七五

チャーチル

R・ペイン／佐藤亮一訳 二九八—七〇

S・ギャラップ／城戸朋子・小木曾俊夫訳 三九一—四四

現代芸術の出生 Y・インシャグプール／川俣晃自訳 一九五—七〇

言葉へカール・クラウス著作集／第7・8巻

武田昌一・佐藤康彦・木下康光訳 八九六—一〇

雑誌『哲学』43号—特集・現代の歴史的状况に対する

哲学の役割— 日本哲学会編 一五四—五〇

現代国際金融の構図—比較経済研究所研究シリーズ(8)

法政大学比較経済研究所／平田喜彦編 三七一—八〇

法律学の夜明けと法政大学

法政大学大学史資料委員会編 二九八—七〇

日本の雇用慣行の変化と法

秋田成就編著 三九一—四四

■放送大学教育振興会(○印はビデオ・ソフト)

病気の成立ちと仕組み 鬼頭昭三編著 二〇六—〇〇

青年期の健康科学 鬼頭昭三編著 二〇六—〇〇

文化と環境 石毛直道・小山修三編著 一九六—〇〇

家庭の経営(改訂版) 原ひろ子編著 二四七—〇〇

児童の福祉 石毛直道・小山修三編著 一九六—〇〇

障害者の福祉 一番ヶ瀬康子編著 一七五—〇〇

環境の健康科学 三ツ木任一編著 二〇六—〇〇

日本疾病史 酒井シヅ編著 一四〇—〇〇

教育心理学 原岡一馬編著 一九六—〇〇

世界の教育 宮澤康人編著 一七五—〇〇

心理学入門 相場寛編著 一六五—〇〇

近代の教育思想 宮澤康人編著 一六五—〇〇

家庭と学校—日本の関係と機能— 山村 賢明 一六五—〇〇

若者と子供の文化 本田和子編著 一六五—〇〇

生涯発達と生涯学習 麻生誠編著 一七五—〇〇

社会心理学(改訂版) 山口勸編著 二〇六—〇〇

G・J・ウィットロウ／柳瀬陸男・熊倉功二訳 一九五—七〇
青春 ジュール・ヴェルヌ論 M・セール／豊田彰訳 三八—一〇
よいは悪い
P・ワツラウィック／佐藤愛監修・小岡礼子訳 一六四—八〇
差異の文化のために L・イリガライ／浜名優美訳 一六四—八〇
音楽祭の社会史—ザルツブルク・フェスティヴァル—

心理測定法	池田央編著	二一六〇円	近代日本文学	浅井清編著	一九六〇円
高等教育論	牟田博光編著	一七五〇円	日本文学における作家と作品―物語と読者―	稻賀 敬二	一九六〇円
乳幼児の人格形成と家族関係	三宅和夫編著	一六五〇円	中国の古典詩	佐藤 保	二一六〇円
視覚障害と認知	鳥居修晃編著	二〇〇〇円	日本の言語文化Ⅱ	山口明穂編著	一九六〇円
憲法概論(改訂版)	樋口陽一編著	一六五〇円	東西演劇の比較	毛利三彌・西一祥編著	二五八〇円
刑法	大塚 仁	一九六〇円	近代日本とオランダ	金井 圓	一七五〇円
西欧政治思想(改訂版)	田中 治男	一六五〇円	日本中世史	五味文彦編著	一八五〇円
日本政治思想(改訂版)	松澤 弘陽	二〇六〇円	イスラーム世界の歴史	後藤 明	一七五〇円
アメリカの政治	阿部齊・中野勝郎	一六五〇円	中国の近代と現代	浜口允子編著	二〇六〇円
西欧政治史(改訂版)	犬童 一男	一六五〇円	アフリカ論(改訂版)	川田順造編著	二〇六〇円
日本政治史―明治・大正・戦前昭和―	坂野 潤治	一六五〇円	ヨーロッパ論Ⅱ―ヨーロッパとは何か―	澤田昭夫編著	一八五〇円
国際経済学(改訂版)	嘉治 元郎	二四〇〇円	確率論	志村 利雄	二〇六〇円
社会学入門(改訂版)	井上俊・大村英昭編著	一七五〇円	統計学(改訂版)	長坂 建二	三〇九〇円
文化と社会	宮島喬・藤田英典編著	一六五〇円	数学の歴史―文化史としての数学―	長岡 亮介	一七五〇円
逸脱の社会学	清永賢二・岩永雅也編著	一六五〇円	科学実験法	兵藤申一編著	二八八〇円
変動する日本社会	阿部齊編著	二九九〇円	量子力学	阿部龍蔵・川村清	二三七〇円
日本経済と産業と企業	伊東 光晴	二一六〇円	量子化学	堀 源一郎	一八五〇円
現代産業技術	道家達将編著	二〇六〇円	自然と科学―生命編	濱田嘉昭・朽津耕三編著	三〇九〇円
線形計画法	横山雅夫編著	二〇六〇円	自然と科学―物質編	平本幸男・毛利秀雄編著	二四七〇円
現代の農林水産業	渡部忠世編著	二〇六〇円	化学史	阿部龍蔵・平川曉子編著	二四七〇円
日本の農業経営	西村 博行	二〇六〇円	生物学史―自然と生きものの文化―	竹内 敬人	二四七〇円
不動産学概論	石原舜介・高辻秀興編著	二一六〇円	生命のしくみ―細胞の働き―	筑波 常治	二〇六〇円
生産経営論	熊合 智徳	二八八〇円	分子生物学	木原弘二編著	二一六〇円
倫理学の基礎	加藤 尚武	一六五〇円	恒星天文学(改訂版)	三浦謙一郎	二五八〇円
インドの思想	川崎 信定	一六五〇円	英語Ⅱ(93)	吉岡 一男	二四七〇円
記号学入門	塚本明子・増成隆士	一三四〇円	ドイツ語Ⅲ(改訂版)―グリムから現代へ―	辻理 編著	一九六〇円
芸術の哲学	渡邊 二郎	二二七〇円			
日本語の表現と理解	宮地裕・清水康行編著	二〇六〇円			
日本語の教育とその理論	宮地裕・田中望編著	二〇六〇円			

フランス語Ⅰ(三訂版)―日常生活のフランス語―

福井 芳男 二九九〇円

フランス語Ⅱ(改訂版)―美しいフランス南西部―

福井 芳男 二六八〇円

中国語Ⅰ(改訂版)―基礎の文法その1― 傅田 章 二〇六〇円

中国語Ⅱ(改訂版)―基礎の文法その2― 傅田 章 二〇六〇円

中国語Ⅳ―沈從文《牛》他― 傅田章編著 二〇六〇円

ロシア語Ⅰ―表現の基礎― 川端香男里・金澤美知子 一九六〇円

ロシア語Ⅱ―生きた文章を味わう― 川端香男里・金澤美知子 一九六〇円

保健体育 スタジオロジ― 平沢雅一郎・臼井永男 二七八〇円

〔放送大学ビデオ教材〕VHS15巻セット・1巻45分
いずれも定価三〇〇〇〇円

○日本人の生活と文化

○社会調査法

○生活のための工学

○情報管理学

○美術史と美術理論

○美と芸術の理論

○地球と宇宙(地球編)

○食物の科学

○都市の住まい

○認知心理学

○学習心理学

○マスメディアと現代

○日本古代史

○物質科学―物理編―

○光と電磁場

盛山和夫・近藤博之・岩永雅也

野呂 影勇

高橋 三雄

木村 三郎

青山 昌文

奈須紀幸・小尾信彌

五十嵐脩・今井悦子

平井聖・本間博文

小谷津孝明・星 薫

金城 辰夫

藤竹 和夫

青木 辰夫

上村 洸

阿部 龍藏

須藤 護

○子供の世界(30巻セット定価六〇〇〇〇円)

宮澤康人・星 薫

〔特別講義ビデオ教材〕VHS全1巻45分
いずれも定価二〇〇〇〇円

○酸性雨

○未来をひらく高分子材料

○ゲートと近代生物学

○日本の自然を語る

○レーザー核融合

○真正粘菌の運動

○日米関係とその歴史と将来

○中学教師

○日本村落の変容

○水の文化論

○回遊庭園としての国土

○遣伝子を追う

○外国語への招待―カンボジア語―

○外国語への招待―ビルマ語―

○外国語への招待―マレーシア語―

○江戸時代の日朝交流①鎖国のなかの日朝関係

○江戸時代の日朝交流②銀の道・絹の道

○不随意運動の発現メカニズム

○日本人の起源

谷山 鉄郎

緒方 直哉

岡田 節人

C・W・ニコル

中井 貞雄

神谷 宣郎

入江 昭

太田 昭臣

ジャクソン・ベイリー

森下 郁子

中村 良夫

内宮 博文

坂本 恭章

奥平 龍二

小野澤純

田代 和生

田代 和生

金澤 一郎

埴原 和郎

〔教師教育ビデオ教材〕いずれも放送教育開発センター編
印刷教材10冊を含み定価各一九〇〇〇円

○教育の方法及び技術―授業の記録と分析―(42分)

○教育の方法及び技術―授業のスキル―(35分)

○教育の方法及び技術——授業におけるメディアの活用—— (38分)

○教育の方法及び技術——学習を助けるコンピュータ—— (39分)

○教育の方法及び技術——学校とコンピュータ—— (36分)

○教育の方法及び技術——情報機器の種類と機能—— (38分)

■明星大学出版部 喜寿記念論文集刊行委員会編 七七二五円

■早稲田大学出版部 太平洋共同体時代の幕開け 小林昭三・増田与・松本洋・山岡道男編著 四五〇〇円

スウェーデンを検証する 岡沢 憲美 二〇〇〇円

石橋湛山の思想的な研究 姜 克実 九八〇〇円

生涯学習と大学——海外に広がる学習機会—— 平岡篤頼監修／加藤幸男著 二三〇〇円

北嵯聞略——影印・解題・索引—— 杉本つとむ編著 三八〇〇〇円

近世紀行日記文学集成 一 津本 信博 一八〇〇〇円

古代「復刻版」V 早稲田大学考古学会・滝口宏編 一二三六〇円

シリーズ 比較家族 第2巻 家族と墓 藤井正雄・義江彰夫・孝本貢編 三七〇〇円

シリーズ 社会経済史 第2巻 教育と経済変化——一七八〇—一八七〇年の

イングランド— M・サンダソン／原剛訳 一七〇〇円

新しい中国文学 全6巻 第1巻 棺を蓋いて—陳建功／岸陽子・齊藤泰治訳 二四〇〇円

叢書 ワセダ・リブリ・ムンデイ フランスの政治——中央集権国家の伝統と変容—— 奥島孝康・中村紘一編 二五〇〇円

フランスの経済——転機に立つ混合経済体制—— 原輝史編 二五〇〇円

フランスの社会——変革を問われる文化の伝統—— 原輝史・宮島喬編 二五〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書 第35巻 連歌集(一) 伊地知鐵男編 一八〇〇円

第40巻 浮世草子集三 神保五彌編 一八〇〇円

■名古屋大学出版部 政治学講義 アダム・スミス 哲学論文集 田口富久治 二八八四円

アダム・スミス 哲学論文集 アダム・スミスの会監修／水田洋ほか訳 四一二〇円

臨床細胞学——textbook clinical cytology—— 田嶋基男・松田実・社本幹博・山岸紀美江編 九八〇〇円

綾足と秋成と——十八世紀国学への批判—— 佐藤 深雪 三二九六円

■京都大学学術出版部 実践宗教の人類学——上座部仏教の世界—— 田辺繁治編著 四四〇〇円

■大阪経済法科大学出版部 創立二〇周年記念論文集発刊部会編 世界経済と日本経済 一八五四円

東アジアにおける社会と文化 現代新聞論〈経法大新書1〉 深江 義幸 一〇三〇円

今昔「騙し」談義〈経法大新書2〉 葛本 一雄 一五四五円

■関西大学出版部 日本経済学史 杉原 四郎 五七〇〇円

杉原 四郎 五七〇〇円

杉原 四郎 五七〇〇円

国際労働移動の経済学 山本 繁綽 四〇〇〇円
日本におけるスタインベック文献書誌 中山喜代市編 六五〇〇円

■九州大学出版会

環黄海经济圈創生の課題と展望—東アジア六都府市会議—

西村明・林一信編 二八〇〇円

税務会計の展望と課題

杉原実編著 三二九六円

旧中国の紡績労働研究—旧中国の近代工業労働の一分析—

岡部 利良 八〇〇〇円

現代に生きる糧—九州産業大学公開講座3—

九州産業大学公開講座委員会編 二〇〇〇円

レヴァーナあるいは教育論

ジャン・パウル／恒吉法海訳 七六二二円

音の魅力にひかれ

城野 節子 一五〇〇円

福岡の民俗文化

佐々木哲哉 七七二五円

筑豊炭鉱労働関係史

荻野 喜弘 七七二五円

ハイネにおける芸術と社会批評の問題

岩本真理子 四二二〇円

現代中国農業の構造変貌

宮島昭二郎編著 七七二五円

地方紡績企業の成立と展開—明治期九州地方紡績の経営史的研究—

岡本 幸雄 六三八六円

西欧ブルジュワジーの源流—ブルグスとブルゲンシス—

宮松 浩憲 八二四〇円

ロード・バイロン『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三編、注解

田吹長彦編 七七二五円

第14回（平成四年度）日本生命財団出版助成図書

刊行期間 平成五年四月～平成六年三月

① 宣教師ニコライの日記（ロシア語原文）

北海道大学図書刊行会

中村健之介（北海道大学言語文化学部教授）他編

② 老いと死——人間形成論的考察

岡田 渥美（東京大学教育学部教授）編著 東海大学出版部

③ 沿岸の海洋物理学

宇野木早苗（元・東海大学海洋学部教授）著 東海大学出版部

④ 蹴鞠の研究——公家鞠の成立

渡辺 融（東京大学名誉教授・日本体育大学教授）著 東京大学出版部

⑤ 近世名古屋商人の研究

桑山 浩然（東京大学資料編纂所教授）著 名古屋大学出版部

⑥ メソコスム 湖沼生態系の解析

林 董一（愛知学院大学教授）著 名古屋大学出版部

⑦ 三宅山御鹿狩絵巻

西條 八束（名古屋大学名誉教授・愛知大学教授）共編 京都大学学術出版会

⑧ 西海捕鯨業史の研究

坂本 満（名古屋大学水圏科学研究所教授）編 京都大学学術出版会

⑨ 水の造形——水秩序の形成と水環境管理保全

鳥巢 京一（福岡市博物館学芸課主査）著 九州大学出版会

加藤 仁美（九州大学工学部助手）著

九州大学出版会

*日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部加盟出版部に出版助成を行なっている。（既刊一五九点）

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-781-0031 FAX 048-726-2962
慶應通信	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-28-3213 FAX 0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第17号)'93春 平成5年4月1日発行 発行所 大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954

頒布価格100円(本体97円)千共